

鏡膝栗毛十編
上

13
1164
42



りよつわちきくきくはひいひらの
口行よい。了つて出くくるがく
候ちみらつれき馬のめしき
そのそののたききききききき
ききききききききききき

下巻



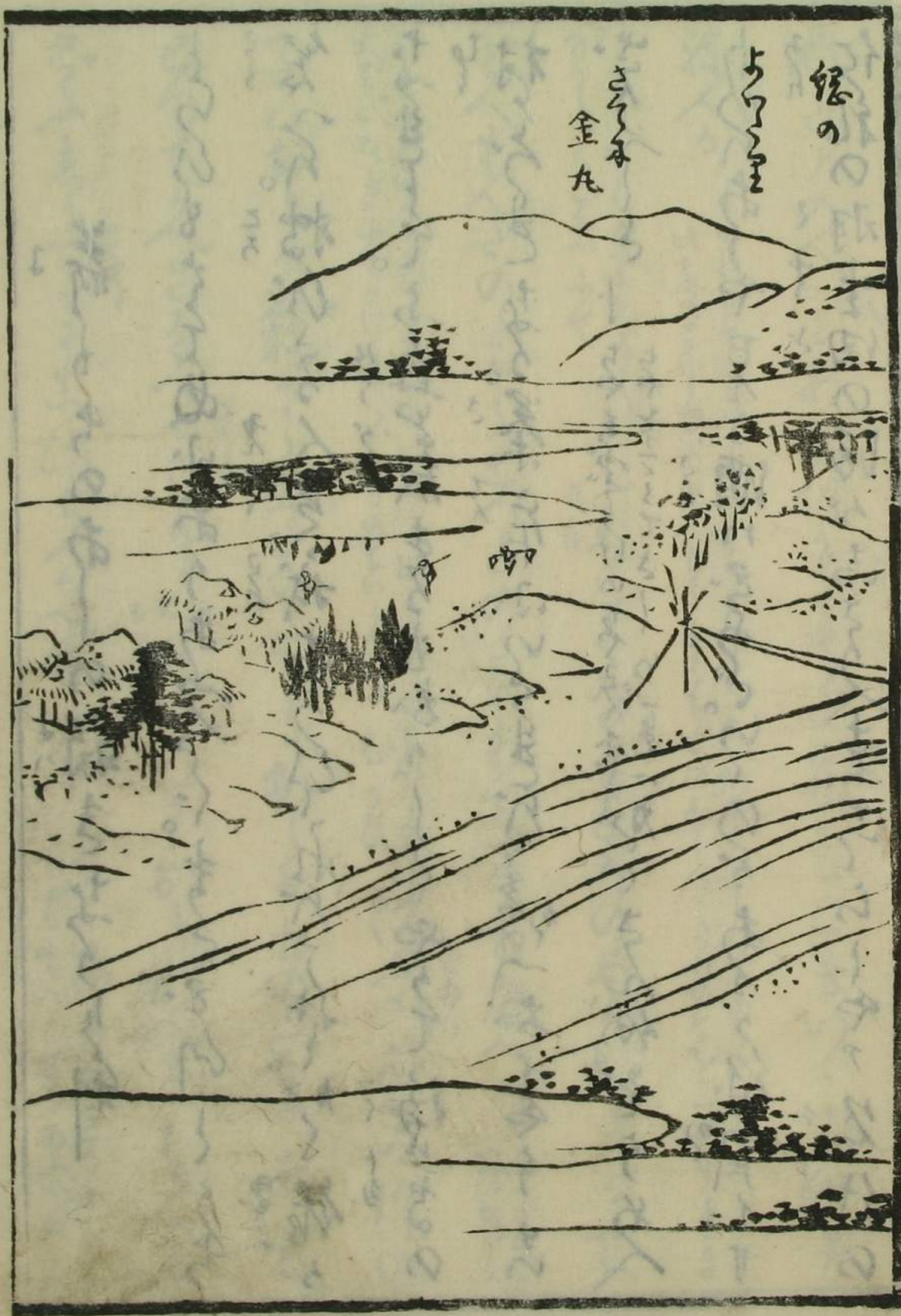
上列草津 温泉道中 續膝栗毛十編 上冊

東都 十返舎一九著

春の首のつらさも東の空を空とわたり
ゆく新ふちのき。おききききききき
濃路の結ぶうかきゆけく鶴の舞ふ
初松魚のつらき。けりけりけりけり
の生をたききき。犀川のるるる。金色の
善光寺の利益のあまのぬり。衛道乃

あざり。まうらの きえん
後ひ佳木の貴飾ひもさうまを。驛このお昌伝お
の向ふさう。沙江岸を傍喜む八つふ一宿一宿
をさより。上及草津の温泉おおもむえんとて。道の程
尋ねあらせ。福喜とらふあまや。安清のくことこのま
まごの荷物と負せ。されよとてま出なるが。柳此
御子八大筆哉とて。茶付まで行程十八里のあまご。
山道ゆく。仁礼田代大筆の三奴の外宿人の宿るく。
雑沓の地のとねまてさうりのう。朝さくより日生るを

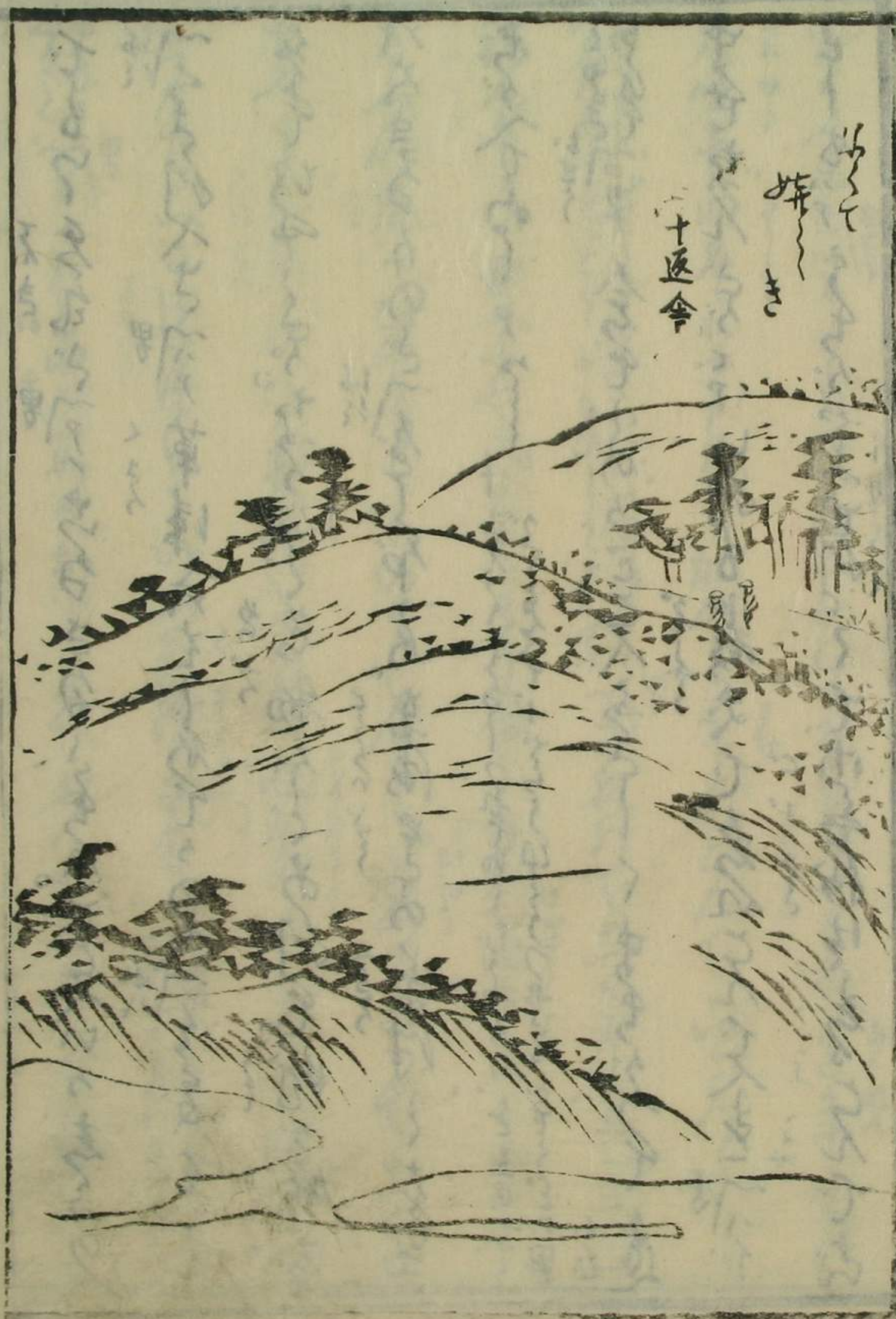
いづき。まきえちのぬきとまら。福喜のゆくあうて
夜ゆらる。此ま田のあ溢して。佳木及あく。葉
内の男んえくえ。二度までたび倒とられ。忍る人
まろく輝をあげて笑あゆぞ。沙江岸を傍喜む
まつね久き道のころさる高持まで
なごうくと。屍りちとはく
かくよまねば喜むはもあこころま
屍飾とはくく。まねばなごうくと



新しんりちのああの弱よわきあありり利

しらもまをぬふあありあありく。ままここののくくららああ
あららどど。精こびびるる人あんん。我わららびびぬぬぐぐ。かくかく振ありり
あららどど。ふふぬぬのの敵たるるももあありり。ややぐぐをを弱よききのの
村むららががままなるる。茶ち店てん小こののままだだ。ああららどどののままららどど
ささららへへ。トトちちままががけけののちちままららどど。かくかくささんんゆゆぞぞううあありり
あららどど。やや見みるる。酒しののままららどど。ののががあありり。糸いとアアイイササ
仁に礼れのの羽う生せい田でんのの海うががあありり。入いままををささららぶぶややアア名な代だいの

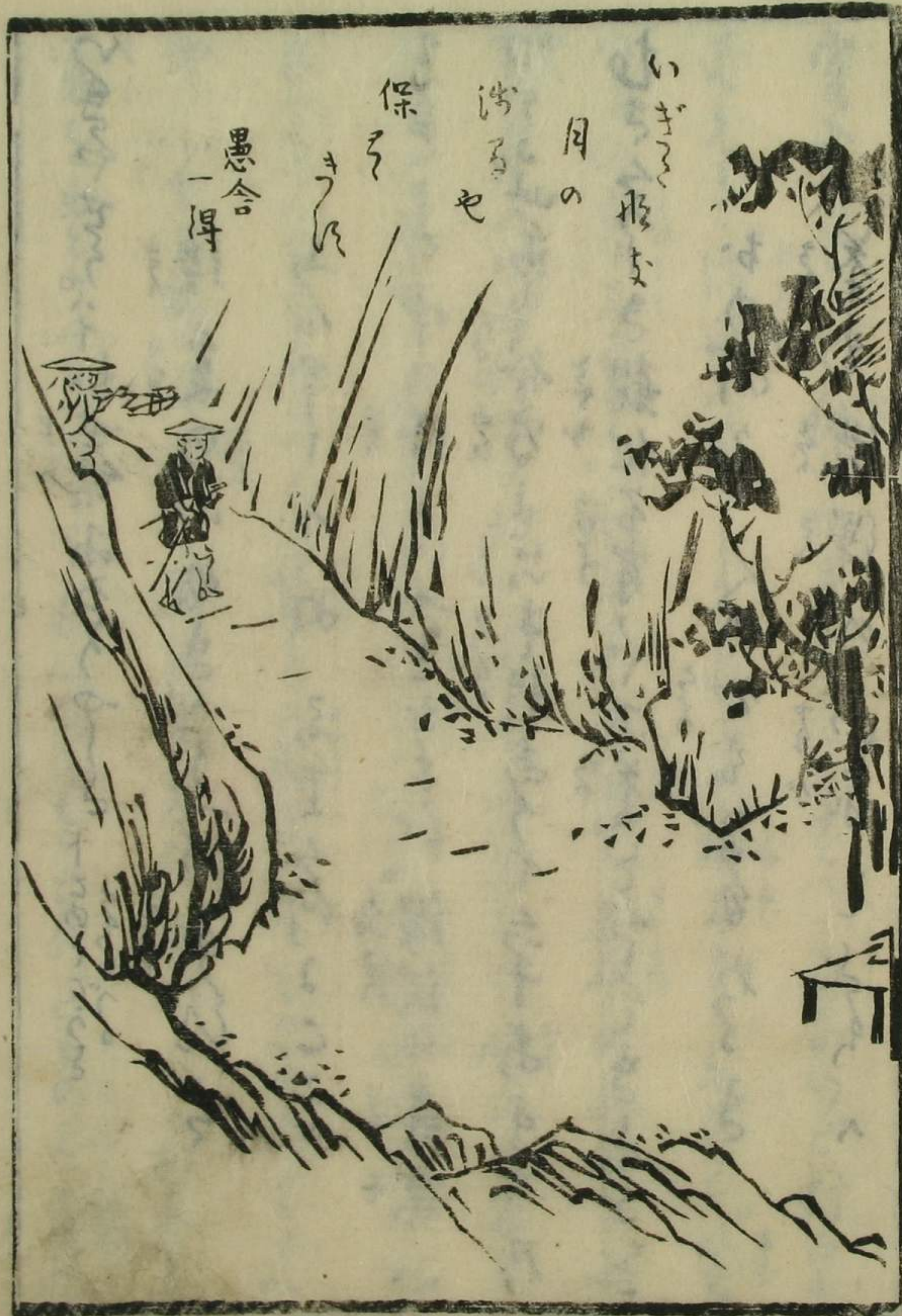
酒さららのの入いアアののままららどど。中ちゆうごごををままららどど。ささららへへ。ややアア
糸いと入いりり。トトちちままががけけののちちままららどど。かくかくささんんゆゆぞぞううあありり
あららどど。やや見みるる。酒しののままららどど。ののががあありり。糸いとアアイイササ
仁に礼れのの羽う生せい田でんのの海うががあありり。入いままををささららぶぶややアア名な代だいの



ゆき
ゆき
十返令



何れの段
田生田氏
ま利の信の
あつり
いづれも
人鬼の
形を
おま
酒少も



愚舎
一得

きり

保

清
也

月の

いぎく
形



仁礼者

大明神

中のさん

中のさん

田

山

村

山

山

山

山

山

ひまやせう。イお世話ふるやうや。トこのとくうと
うらなひづる。

陰裏のお娘さぶらうへの事ひら

あんざーう、ぬ ふまうのよこそ

とまよる中の降といふをちき死。浪沢の建場ふ

つる。此おも谷者よ只を軒あうて、ち千あまう、乃

むさううき親にる宵ぐぐふ茶あうとてきさうを

かのづう人の心もあなぬるま

茶あも 浪沢の山家そごあ、

室ふまむく体きてま出るが。まへて此のらご村屋

月えまど。沙回山のうらう通あて。樹木さうふるく。ま

ううの寄るるまう。まあうも乃とて。退屋のあまうふ

月トらあり。神のううかりうく移入まちで。晩のこぬう

も。ろくまやアあめ入うう。魔よひく川敷向がありや

まど。あんでもあううが。龍耳と亡旨はるうて。こまうて見

やううやア移入ううその川ありう裡ごの。ドレくおまごが

遷を由そふ。らんごも長んらうをこのりこのりのがこ目。



草^{くさ}津^つの温^{ぬる}泉^{いづみ}を^をぞい^いり^りぬ^ぬる
 生^{せい}る^る其^{その}の^の芽^めは^は小^こま^まて^てう^うみ^みを
 今^{いま}を^をさ^さう^うと^とひ^ひろ^ろ湯^ゆの^の花^{はな}

續撰 粟名十編上冊終



空板

